ビジネスパーソンへの推奨本

評者 **上田 準二** 氏 ［ファミリーマート会長］

「試すこと」に喜びを

本書は、仕事はもちろんのこと、人生をより有意義に楽しく過ごすための「成功のヒント」が随所に紹介されている。「コカ・コーラ」など、誰もが知るヒット商品の開発エピソードを織り交ぜながら、対話形式で展開されていくため、読みやすい。

舞台は大雪のため閉鎖された空港。主人公は35歳のビジネスマン。ある程度の給与をもらっている以外、誇れることがない、一生懸命働いているのに出世もできない、と仕事にも人生にも行き詰まりを感じている。

空港に閉じ込められ、ふてくされている主人公に、格子縞のズボンにポロシャツ姿で恰幅のよい老人が近寄ってくる。その老人の名は「マックス・エルモア」。発明家であり、起業家で、実業家や政治家がこぞってアドバイスを求めるほどの逸材である。

「仕事は楽しいかね？」。マックスが主人公に突然質問を投げかける。主人公は、友人と起業し失敗した話など、苦々しい思いや悩みを打ち明けた。

マックスは主人公の考える「成功への戦略」を教えてほしい、と問いかける。主人公が語る「目標の設定」や「生きる姿勢を変えること」など、一般的なビジネス書で正しいとされる「成功への戦略」を、マックスはあっさりと否定する。ここから、一夜限りのマックスの講義が始まっていく。

『仕事は楽しいかね？』
デイル・ドーテン
きこ書房
1365円

マックスは、主人公に1つの言葉を贈っている。「試してみることに失敗はない」と。成功した人は、ある時点で仕事に対する目標を変えた人たちである。また、私たちの社会では、時間や進捗に関して直線的な見方をするが、人生とは言うほど規則正しいものではない。今日の目標は明日のマンネリであり、明日は今日と違う自分になることが大切であると語っている。成功する人たちは、自分がどこに向かっているかは分かっていない、ただ遊び感覚でいろいろやって成り行きを見守ろうとしているのだと。

例えば、薬屋から誕生した「コカ・コーラ」やテント用の帆布から生まれた「リーバイスのジーンズ」は、普段から注意さえ払えば、目にできる“偶然”を生かした商品であるとしている。

そして、マックスは「目標の最大の問題は、それが達成されるまで世の中が待ってくれないことである」という。また、ある事柄を完璧な状態として決めてしまったら、それ以上は良くなることはない。完璧とはダメになる過程の第1段階である、と指摘する。本当の達成というのは、あるべき状態より良くあることである。ただ良いだけではなく、目を見張るようなものであること、いわばマジックであると語る。

今やオフィスになくてはならない存在である「ポスト・イット」の誕生を例に、革新というものは後から見れば簡単そうに見えるものであると語る。「マジックテープ」もしかり。今そこにある問題と“仲良くなる”ことで、解決策を見いだした事例である。成功者は立派なビジョンを持って突き進んできたわけではない。彼らは冒険者であった。アイデアが来るのをただ待つのではなく、探し続けていたのだ。

私たちファミリーマートは、「ファミマシップ」という行動指針を制定している。「お客さまの期待を超えよう」「仲間を信じ、ともに成長しよう」「豊かな感性を磨こう」「挑戦を楽しもう」「世の中に向かって正直でいよう」と、いずれも分かりやすい言葉でまとめたものだ。これはまさしく本書の示す「目標」に対する考え方や「試すこと」に対する考え方に通じるものである。

最後に、本書では「試すこと」に喜びを見いだしてほしいと言って締めくくる。挑戦することに楽しみを感じ、とにかく遊び感覚で試してみる。この大切さを改めて認識することができる。悩み多きビジネスパーソンの背中をそっと押す書籍であると言える。■

写真：スタジオキャスパー